横浜市・Y邸について

神奈川大学教授
公益社団法人 横浜歴史資産調査会 社員 内田 青蔵

Y邸古写真

Y邸は、横浜市西区の小高い丘の途中に建つ木造一部2階建ての瓦葺の洋風住宅である。建築年代は、昭和3(1928)年といわれ、平屋の木造住宅を購入しその横に洋館を建てたという。この聞き取りを裏づけるように、多少の増改築はあるものの、平屋の和館部に相当する木造住宅部は独立した玄関部を持つ和室からなる和風住宅であり、2階建ての洋館部は廊下を挟んで和館部と連結され、廊下の端部は洋館の玄関となっている。洋館の1階は、天井が高い洋間で廊下伝いにかつての書庫とトイレが配され、2階には床の間のある和室と高台を生かした展望用のテラスがある。まさに間取りからは、小規模な和館と洋館の並置された小規模和洋館並列型住宅といえる。ただ、外観を見ると、洋館は窓形式が1・2階共に上げ下げ窓、和館は引違窓とその形式が異なるものの、建物全体がグレーのモルタル塗という共通した仕様で仕上げられている。小規模和洋館並列型住宅の多くは、外壁の仕様も和館と洋館は異なるもので、一目で洋館が付設されていることが分かる。それゆえ、通称、"洋館付き住宅"とも称されているのだが、Y邸では外観からは和洋館の区別が見られない。一般に洋館の外壁は、関東大震災前は木造下見板張りが多いものの、震災後は火災時の延焼を防ぐために塗壁が奨励された。関東大震災の被害は、このように洋館付き住宅にまで影響を及ぼし、その姿を変えたのである。Y邸は、まさにこうした関東大震災後の建築界の動きを反映した昭和初期の住宅遺構といえる。なお、Y邸の玄関部には、鮮やかなステンドグラスが見られる。小川三知作といわれるもので、戦前期の洋風住宅のもてなしの空間としての玄関の様子が見て取れる。このステンドグラス越しの光の満ちた空間もY邸の魅力のひとつであり、横浜市に残る貴重な住宅遺構といえよう。

Y邸外観

Y邸玄関ステンドグラス

ドッグヤードガーデン プロジェクションマッピング

国重要文化財である旧横浜船渠第2号ドックでランドマークタワーの開業20周年を記念して、7月16日からプロジェクションマッピングが実施されている。

第1弾のタイトルは「YOKOHAMA ODYSSEY(ヨコハマオデッセイ)」。横浜を舞台としたタイムトリップアドベンチャーで、ドックヤード全体が一つの船となり、時空を超えてタイムトリップするストーリー。

プロジェクションマッピングとは、既存の建物や壁面などの立体的な面にプロジェクターによってCG映像や文字を投影する技術で、東京駅などでも実施され話題となった。

ドックヤードガーデンでは、かつて造船所のドックであった独特の形状を活かし、高さ約10メートル、横幅約29メートルのすり鉢状の舟型の石壁に映像を投影している。

11月7日からは、テーマを入れ替えた第二弾の上映が予定されており、今後も、季節ごとに映像を入れ替えながら実施していくとのことなので、ぜひ一度ご覧いただきたい。

http://www.yokohama-landmark.jp/web/pickup/special/13dockyard_pm/top.html

キング―神奈川県庁本庁舎 初の夜間公開

本庁舎屋上公開の様子

横浜三塔のひとつ神奈川県庁本庁舎は定期的に休日の庁舎公開をしている。

公開しているのは、知事室、旧貴賓室(第3応接室)、旧議場(大会議場)、本庁舎歴史展示室、屋上などで、訪れた歴史的建造物ファンを大いに喜ばせている。

また、8月14日から16日には、初の夜間公開も実施し、世界的なデジタルアーティスト、長谷川章氏が考案した「デジタル掛け軸」を本庁舎外壁に投影した最終日には、約4500人が来場した。

公益社団法人 横浜歴史資産調査会(YOKOHAMA HERITAGE)のとりくみ

公益法人化記念シンポジウム『明日の歴史を生かしたまちづくり』

シンポジウムの様子

平成25年4月より横浜歴史資産調査会(ヨコハマヘリテイジ)(以下YHG)は内閣府認定の公益社団法人として新たなスタートを切った。この公益化を記念し、「明日の歴史を生かしたまちづくり」と題して、平成25年6月9日(日)にキングの塔の愛称で親しまれる歴史的建造物 神奈川県庁本庁舎の大会議室(旧議場)にてシンポジウムを横浜市都市整備局、神奈川県と共同で開催した。開催挨拶、米山淳一((公社)横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)・青木治氏(横浜市都市整備局担当理事・企画部長)・森谷保氏(神奈川県県土整備局都市整備課長)が挨拶。

第1部の基調講演では、後藤治氏(工学院大学教授)より国内の歴史的建造物を生かした事例も踏まえ、歴史的建造物を取り巻く環境の変化が紹介された。第2部では、「明日の歴史を生かしたまちづくり」と題したパネルディスカッションを開催。パネリストに西和夫氏(神奈川大学名誉教授)・堀勇良氏(建築史家)・嶋田昌子氏(横浜シティガイド協会副会長)・綱河功氏(横浜市都市整備局都市デザイン室長)を迎え、コメンテーターに後藤治氏(同上)、コーディネーターに米山淳一(同上)。横浜市が「歴史を生かしたまちづくり」を展開してきた経緯やYHGが公益法人となったことにより、「歴史を生かしたまちづくり」をどのように推進していけるのかという議論が交わされた。

県庁職員による見学ツアーの様子

会場からは、市認定歴史的建造物の所有者が高齢化しており、相続の問題が注目される中で、段階的な寄贈などの道がないかとの意見があった。当日は神奈川県庁舎の見学ツアーも開催され、ツアー参加者40名、シンポジウム90名と盛況であった。

ヨコハマヘリテイジ講演会・シンポジウム『明日の山手を考える』
―― 横浜山手近代建築資産悉皆調査・所有者意向調査報告会

講演会・シンポジウムの様子

本講演会・シンポジウムでは、YHGが文化庁の助成を受けて平成22年～平成24年にかけて実施した「横浜山手近代建築資産悉皆調査・所有者意向調査」の報告会と、その結果を生かして「明日の山手」の歴史的環境の保全を目指すことを目的に開催した(平成25年6月23日神奈川近代文学館ホール)。第1部では、記念講演として鈴木智恵子氏(エッセイスト)から山手の魅力や25年前に「歴史を生かしたまちづくり」が始まった前後の山手の市民活動等の話があった。また、基調講演として、約25年前に山手地区の西洋館を調査された坂本勝比古氏(神戸芸術工科大学名誉教授)から当時の調査の紹介や現在でも多くの西洋館が残っていることに高い評価を賜った。

第2部では、関和明氏(関東院大学教授)・水沼淑子氏(関東学院大学教授)・白川葉子氏(山手歴史文化研究会)・上村耕平((公社)横浜歴史資産調査会)より調査報告が行なわれた。第3部では、西和夫氏(神奈川大学名誉教授)・堀勇良氏(建築史家)・鈴木智恵子氏(エッセイスト)・菅孝能氏(㈱山手総合計画研究所代表)をパネリストに迎え、米山淳一((公社)横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)がコーディネイト。これまでの山手の取組みを踏まえ、末永く山手を横浜の宝として保存していくために、横浜市の「歴史を生かしたまちづくり要綱」にある歴史的景観保全地区や国の重要伝統的建造物群保存地区に選定してはどうかという提案も上がった。

調査を基に作成した報告書とリーフレット

ヨコハマ陸蒸気サブレのご紹介

ヨコハマヘリテイジが鉄道開通140周年を記念し、横浜の新しい名物として㈱三陽物産と協働で「ヨコハマ陸蒸気サブレ」を開発した。当時の様子が分かる貴重な資料を掲載したミニブック付き。売り上げの一部はヨコハマヘリテイジの活動費として寄付される。横浜高島屋7階ヨコハマグッズ横濱001コーナー等で販売中。

陸蒸気サブレー ¥580

発行：横浜市都市整備局都市デザイン室 横浜市中区港町1-1 TEL 045-671-2023 FAX 045-664-4539 編集協力：公益社団法人 横浜歴史資産調査会（YOKOHAMA HERITAGE）

歴史を生かしたまちづくり
横濱新聞
YOKOHAMA
第28号
平成25[2013]年
11月10日発行
Since 1989
YOKOHAMA HERITAGE XXVth ANNIVERSARY
歴史を生かしたまちづくり25th

撮影：米山淳一

生まれかわり、語り継ぐ。

霞橋(旧江ヶ崎跨線橋)認定

ものつくり大学教授
公益社団法人 横浜歴史資産調査会 社員 増渕 文男

新山下運河に架かる3代目霞橋が平成25年3月21日にトラス橋として新たに開通した。この付近の街並や通過交通量などからも、この大型トラス橋の姿に不思議さを感じるかも知れない。これを解明しながら新しい霞橋を紹介する。

この橋梁を渡るため正面に立つと、まずトラスの橋門が視野に入り、その高さに目を奪われ、次にその上方を注視するとラチス状(格子模様)の美しい橋門構が見え、最近の橋梁には見られないレース編みで飾ったような稀なデザインになっている。そしてこの橋梁を渡ると、三角形に組まれたトラス部材が多々あり、その部材表面の肌が大そう荒れていることに気づく。この時点で、入口付近にある説明板を読まずとも、この橋梁の大きさ、時代性に違和感を抱く。その通りで、この古いトラス橋は現埋立地が出来る以前に、別の場所で活躍していたのである。では、何処から移してきたのかを明らかにしよう。

このトラスの大きさ、美しい橋門構は、横浜市民にはどこか見覚えがあるはずで、これを思い起こすには東京へ行く折、横須賀線に乗車して新川崎駅に着く手前の車窓から見た、トラス橋のある長い陸橋を思い出してほしい。その陸橋こそが新鶴見操車場にあった「江ヶ崎跨線橋」なのである。そこに2連のトラス橋があり、往時の姿を知る人には、新しい橋は目を疑う程の生まれ変わりようで、それはおばあさんが妙齢な貴婦人になったような感じである。この橋梁はもともと複線式の鉄道橋で、生まれながらに大きいものであった。そして橋長60m級の2連あったトラス橋の良好な部材のみを選別し、33mの橋梁1橋に組直した。その結果、橋長が短縮されトラスの高さとの比が2倍になり、迫力ある大きい姿に変貌し、見る人に多少なりとも違和感を与えている。

江ヶ崎跨線橋は自動車を通す道路橋として使われていたが、元来この橋梁は鉄道橋として造られたもので、汽車を通していた時代があった訳である。

そもそも、この鉄道橋は明治29(1896)年に日本鉄道土浦線(現常磐線)隅田川鉄道橋梁として建設された。当時の政府にはその建設資金は潤沢でなく、民間資本に頼ることになった。そして東北開発のために多額な費用を投入して200ft複線式プラットトラス2連と60ftプレート桁19連を発注することとし、また我が国の当時の技術では大型トラスを建造できず、外国企業から入札を募った結果、イギリスのHandy side社製のプラットトラスに決まった。

その後、老朽化や機関車重量の増加などに伴い、昭和3(1928)年に撤去され、昭和4(1929)年には巨大な新鶴見操車場(横浜市鶴見区)を跨ぐ横断道路を建設し、そこに江ヶ崎跨線橋(前述のトラス2連)を架設した。

昭和54(1984)年には新鶴見操車場が廃止となり、このトラス橋は平成17(2005)年に横浜・川崎市に無償譲渡され、平成21(2009)年には撤去され、そして3代目霞橋として中区新山下一丁目のこの地に嫁入りしたのである。

我が国の橋梁建設史をたどると、明治初期はイギリス製のトラス橋が独占し、橋梁規模(橋長)が100ft、200fなどに規格化されており、そしてトラス橋の幅も単線式から、後に複線式に拡張された。この霞橋は複線式の初期のものであり、また当時、民間鉄道はイギリス製トラス橋と、国有鉄道はアメリカ製大型鋼トラス橋とに別けられ、そして後発のアメリカ式トラス橋に追い越される時代にイギリスで建造されたものである。この時代のトラス橋建設史に残る希少価値の高いものと言える。なお、長大橋の橋梁技術は、今なお両国で競い合いが続いている。

技術的な面では、橋門構、リベット継手、そして斜材下端部にあるコッタービン(楔を使ってトラス部材長を調節する装置)の存在、欠円型のローラー支承など、当時の規格化された構造から逸脱した特徴を持ち、当時の架橋技術を現在に伝える貴重な物証である。

江ヶ崎跨線橋からの移設に当たっては、横浜市道路局が土木学会員等を集めた委員会をつくり、橋長を半分に短縮し、前述の特徴を残すように考慮したトラス主部材は、既設の再利用率6割に達している。塗装色は周辺環境との調和を図るため現代的な白色系を採用した。

我が国で二度の移設を経ても、なお現役の道路橋として活用することは稀なことで、霞橋は横浜市の歴史的建造物を保全・活用する姿勢を示す象徴的なトラス橋である。

霞橋の諸元：下路式プラットトラス道路橋、橋長32.96m、
支間長31.40m、有効幅員6.0m、トラス高さ9.36m

港のトラス橋見本市

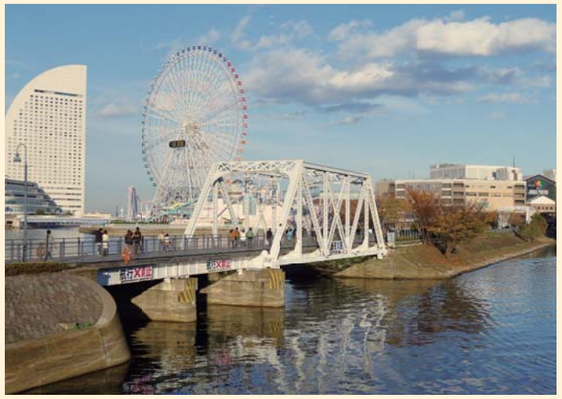
文・増渕 文男　写真・米山 淳一

横浜港付近には歴史的建造物が数多く残り、土木産業遺構で20世紀初頭のトラス橋が各国・多形式のものが保全され、さながら「生きたトラス橋の博物館」のようである。

みなとみらい地区の汽車道にはトラス鉄道橋群があり、表中の港一号、二号、および橋長を短縮した三号橋梁の100ftクラス橋梁が連続している。そして新港埠頭から大桟橋に向かうところに国産初期の新港橋梁があり、さらに山下埠頭から中村川を遡れば道路橋の浦舟水道橋、そして新山下運河には新加入した霞橋がある。他、今の2代目万国橋はコンクリートアーチ橋だが、初代はドイツ系ボーストリングトラス橋が架かっていた。3代目にこのドイツ系トラス橋を復活させれば、各国のトラス橋が揃うので、それを期待したい。

港三号橋梁（旧大岡川橋梁）

新港橋梁


（手前）港一号橋梁　（奥）港二号橋梁

霞橋（旧江ヶ崎跨線橋）　橋長：約32.9m

橋　名	竣 工 年	国 名	形　式	移設橋梁（最初の竣工場所）
港一号橋梁	明治42（1909）年	アメリカ	クーパー形トラス	
港二号橋梁	明治42（1909）年	アメリカ	クーパー形トラス	
港三号橋梁	明治39（1906）年	イギリス	ポナール形トラス	炭礦夕張線・旧夕張線橋梁
新 港 橋 梁	大正 1（1912）年	日　本	ポナール形トラス	
浦舟水道橋	明治26（1893）年	イギリス	プラットピントラス	堀川・旧西之橋
霞　　橋	明治29（1896）年	イギリス	プラットトラス	常磐線・旧隅田川鉄道橋梁

横浜市認定歴史的建造物に新たに3件を認定！

25年度は霞橋（旧江ヶ崎跨線橋）、旧日本綿花横浜支店倉庫、山手26番館の3件を、横浜市認定歴史的建造物に認定した。

旧神奈川労働基準局（元日本綿花横浜支店倉庫）

旧神奈川労働基準局（元日本綿花横浜支店倉庫）と旧関東財務局（元日本綿花横浜支店事務所棟）は、昭和3［1928］年2月に日本綿花株式会社横浜支店として創建された。日本綿花は綿花輸入商社として明治25［1892］年に創立された会社である。昭和20［1945］年に米軍による接収を受け、昭和29［1954］年には国が買収した。そして、昭和39［1964］年に、倉庫が神奈川労働基準局となった。

旧日本綿花横浜支店倉庫

この建物は日本大通りの東南隅に位置し、この地区でかつて内外の商社による活発な商業活動が行われたことを示す良きモニュメントとなっている。特に戦前の倉庫棟を伴った商社オフィスビルの遺構はこの建物と旧三井物産横浜ビルおよび旧三井物産横浜ビル１号倉庫のみであり、大変貴重である。

開口部の改変等が行われているものの、外壁のスクラッチタイルは、事務所棟と共に一体的な外観をよく留めている。内部柱は倉庫建築によく見られるマッシュルーム柱であり、当初の用途が倉庫であったことを伝える重要な要素である。設計は渡辺節建築事務所によるもので、戦前・戦後を通じて関西建築界の中心的存在であり、その主宰者・渡辺節の最盛期の作品の一つとして、また、関東における数少ない作品としても貴重である。

横浜公園側からの景観において、この建物は事務所棟とともに日本大通りの顔とも言える大変重要な構成要素となっている。神奈川県庁本庁舎、横浜情報文化センター（旧横浜商工奨励館）、横浜地方・簡易裁判所、旧三井物産横浜ビルと並んで、昭和初期の日本大通りの街並みを彷彿とさせる重要な建造物である。

今後、旧日本綿花横浜支店倉庫は改修工事を経て、平成27年度より中区役所別館として活用される予定である。

山手26番館

山手26番館は、関東大震災後の大正末期に山手本通りに面して建てられた、平屋建ての主屋と、木造2階建て付属屋からなる西洋館である。付属屋は使用人が暮らしていたとされ、主屋と併せて現存することで、当時の外国人の生活スタイルを表している。震災復興期から第二次世界大戦までの間に山手に建てられた西洋館は、戦災や戦後の開発により減少しており、現存する山手の西洋館として大変貴重な建物である。

敷地は山手本通りからすぐ崖地となっており、通りに面して付属屋が、奥まった位置に主屋が配置されている。山手本通りを尾根として、その両側が崖地になっている山手の特徴的な地形を上手に生かした設計がなされている。

主屋と付属屋は、下見板・軒裏は白色、柱・窓枠・鎧戸・軒周りは緑色となっており、洋館らしい配色である。主屋の南面の窓まわりは大変特徴的で、菱型をモチーフとした引違ガラス戸、および装飾の施された腰壁からなる。外壁の下見板は板の下部にモールディング（繰り型）が施され、現存する山手の洋館で同様の下見板は他に見られない。２本の煙突はともにモルタル掃付仕上げで、おそらく創建当初のままである。基礎部分は煉瓦造、小屋組は和小屋である。梁、小屋束などの材には転用材が使われ、ほとんどの小屋束に、通り芯符号の墨書きが見られる。

山手26番館の外観

外観や使用された材料などから、震災前の洋館の意匠的な特徴を引き継いでおり、大変貴重である。また、山手本通りに面して現存する数少ない西洋館としても極めて貴重である。

日立香梅寮の解体時記録調査を実施

文と写真：株式会社 ユー・エス・シー　兼弘 彰

戸塚区戸塚町の旧東海道（国道1号）沿道に建つ「日立香梅寮」は、明治期に地元の名士である内山家の邸宅として建てられた近代和風住宅である。

平成24年春まで、（株）日立製作所の社交クラブとして使用されていたが、老朽化に伴い解体されることとなり、平成25年7月～9月にかけて、解体時の記録調査が実施された。

日立香梅寮の敷地は、かつての旧東海道戸塚宿の字中宿にあった2軒の脇本陣（安佐衛門、佐兵衛）を併合した位置にあり、現在では数少ない旧東海道戸塚宿を偲ばせる遺構である。そのためこの調査では、建物の調査のほか、敷地の発掘調査も行うことになった。

香梅寮の外観

建設者の内山敬三郎は、明治32年に（株）戸塚銀行（現在の横浜銀行 戸塚支店の前身）を設立。明治35年から2期に渡り衆議院議員も勤めた。この他、矢沢に井戸を掘り、旭町まで誘水した水道事業でも知られる人物である。

建物は、大まかに主屋と離れの2棟構造となっており、主屋は、平屋、寄棟で、古民家様の松丸太で組まれた小屋組を持ち、竈（へっつい）のあった台所の痕跡がある。離れは、各階2間続きの2階建で、1階部分の奥の間からかつては洋室であった痕跡が発見された。離れの2階の書院造りの和室の縁側には、日本海海戦時のロシア海軍バルチック艦の甲板部分と伝承される銃痕のあるチーク材が使われている。また、敷地の道路沿いには蔵があり、基礎はレンガ積でキングポストトラスの小屋組、モルタル御影砕石洗出仕上外壁、出入口に金庫扉が設けられていた。

蔵の小屋組（解体時）

二階広間

建物解体後の敷地発掘調査では、現在の地盤面より80cm程下に江戸期の地盤面が発見され、松杭の地業、井戸の跡、室(むろ・地下貯蔵庫)の他、煉瓦片、陶磁器等が発見された。また、離れの奥の側にかつての厠（かわや）の跡が残り、便甕（べんがめ）が出土した。今回の調査では発掘範囲が限られていた為、全体像は明らかにならないが、江戸期から現在にかけての複数の建物の重層した遺構が確認出来た。

この様に日立香梅寮は、和洋折衷式の様式を持ち、近代金融業を営む内山家の住宅として、その敷地を含めて歴史的に非常にユニークな住宅遺構である。今回の調査では、近世の旧東海道から近代の国道1号沿道建築の重層した歴史的遺構の存在が確認できる希少な記録として、戸塚地域の歴史の一幕を垣間みるという機会に接することができた。この成果を一つの史料として今後さらにこの分野での研究が進むことを期待したい。

江戸期の地盤面

横浜旧東海道お宝自慢ワークショップ開催

〔保土ケ谷区・戸塚区〕

旧東海道の宿場町であった保土ケ谷区と戸塚区において、「横浜旧東海道お宝自慢ワークショップ」が開催された。これは、地域に残る歴史的資料を集め、旧東海道の歴史的景観保全に役立てることを目的としたものであり、市民と行政が協働で実施した。

保土ケ谷区では、平成25年9月19日（木）午後6時より、保土ケ谷公会堂で開催し、地域が所有する昭和40年代以前の元町、保土ケ谷・天王町駅周辺等の写真を集め、スクリーンに映し出し、所有者の方に思い出などを語っていただいた。当日は、およそ30人の参加者が集まり、当時の思い出のみならず、コメンテーターによる時代背景等の説明などもあり、参加者からも質問等が多く出るなど大いに盛り上がった。

保土ケ谷区ワークショップ開催状況

戸塚区では、翌週9月26日（木）午後6時より、戸塚区役所多目的スペースにて開催され、再開発によりまちの姿が大きく変わった戸塚駅周辺を中心に昔の写真等をスクリーンへ映し出した。当日は、およそ40人の参加者があり、再開発以前の戸塚のまちをなつかしむとともに、撮影場所が不明だった写真が参加者の協力により特定できるなどこちらも大いに盛り上がった。

今回のワークショップでは、スクリーンを2面用意し、昔の写真のみではなく、その写真の撮影場所の現状も映し出し、昔と今を比較することで、町並みの変化を参加者にわかりやすく伝えるとともに、撮影箇所の特定も行い、参加者からは非常に好評を得た。

2回のワークショップに共通して、参加者からは、「予想以上の盛り上がりであり、まだまだ地域に眠るお宝写真があるはず、今後も続けてほしい」などの意見や要望をいただいた。今回のテーマは「旧東海道」であったが、この取組みは、地域に合わせたテーマでの展開が可能であり、市民と行政の協働により、一層内容の充実したワークショップの開催が可能であるので、今後も継続した開催が望まれる。

収集した写真：保土ケ谷区保土ケ谷町（昭和30年代）
撮影者：吉川明 氏

一方で、収集した写真等の資料を有効に活用し、次世代へ地域の歴史をどう伝えていくかという課題も出てきた。解決へ向けた取り組みの一つとして、現在横浜市では、収集した写真等を今回のワークショップのみの利用ではなく、今後の歴史を生かしたまちづくりを推進する活動に広く活用するため、オープンデータ化の取組みを推進しているところである。

日吉の戦後モダニズム建築

〔慶應義塾普通部本校舎解体前調査〕

慶應義塾普通部本校舎は、港北区日吉の慶應義塾普通部キャンパス内の建物であり、空襲で失われた三田校舎の移転先として、谷口吉郎の設計により昭和26［1951］年に建てられた。なお、当初設計には本校舎を中心とした拡張計画が示されていたが、朝鮮戦争特需による資材の高騰等の理由により実現には至らなかった。

外観は極めてシンプルなつくりで、まさに「豆腐のような」という表現が似つかわしい。白い箱型の校舎には大きく開けられた窓以外にほとんど装飾はなく、唯一屋上部分に設けられた薄い庇がアクセントとなっている。なお、この意匠は、同じく谷口の設計による日吉キャンパス内の日吉寄宿舎（横浜市認定歴史的建造物）にも共通している。また窓は柱間いっぱいにとられており、日当たり、通風が十分に確保されるつくりとなっている。

竣工当時の外観写真　［提供：慶應義塾普通部］

内部廊下

一見すると変哲のない普通の建物だが、内部を含めて丹念に観察すると、洗練された意匠や細やかな配慮に気付く、戦後建築の逸品である。（平成25年10月に解体をされ、新校舎の建設事業が進められている。）

小学校で日本最初のガス会社の遺構出土！

横浜瓦斯会社ガスホルダー基礎遺構

横浜市立本町小学校（中区花咲町）の校舎増築に伴う事前の調査により日本で初めてガス事業を起こした横浜瓦斯会社（のちに横浜瓦斯局になる）内にあった横浜市瓦斯局時代の円筒形のホルダー（ガス溜）の煉瓦積み基礎が発見された。

この基礎の一部については、横浜都市発展記念館の屋外展示施設に展示される予定となっている。

出土したガスホルダー基礎遺構

旧横浜刑務所塀の取壊し

現在、港南区総合庁舎の移転計画が進められている場所は、近隣の横浜刑務所の跡地の一部であり、刑務所時代のコンクリート塀が残置していた。

この塀は、新庁舎整備にあたり撤去されるが、昭和11（1936）年の竣工移転当時の数少ない遺構であるとともに、骨材に関東大震災で発生した煉瓦礫が用いられていると地域で伝えられていることもあり、一部を切り取り新庁舎に展示する計画である。

旧横浜刑務所塀